續拾遺和歌集 上

和書門
二五三五九號 類
一二四函
九架
二冊

80
内閣文庫
和書
二五三五九 類號
二冊
九架
二〇〇函

和歌

内閣文庫
番號 和 25350
冊數 2 (1)
函號 200 80

200-80

綴じ部（喉部分）の文字等が開きが不鮮明な場所あり

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

拾芥抄云文永十一年
月日依亀山院ニ宣
前權大納言為氏
卿撰之弘安二年
十二月廿七日奏覧
之

和學講談所
漢草文庫

續拾遺和歌集卷第一

春哥上

去年のこころをみなれば

前大納言為家

千五百番の合よ　後京極摂政前太政大臣良經

ちりてとまらぬ春の花をうらやまし

久安六年崇德院ノ百首ノ時　近衛

去年の初の日

皇太后宮大夫俊成

春立てよろこぶ人は去年の日の

影ぞ

左二位家隆

天暦ノ御時ノ歌合ニ

建保四年八十二ノ時院ノ百首ノ時　順德

春議雅經

久しきはあらぬ宮ぬりうつして家もあへぬ去ぬ人ぞ

初春の日を

正二位知家

みやぬりの上の雪立てちらぬ山ぬ去ぬ人に

寛治元年十首ノ合ニ　後深草

今も松宮ぬ去ぬ朝霞

早春霞

万里小路右大臣　公基

順徳院御製

降つもる松のみどりの深雪にはなほ春待ぬ宿の梅

従二位家隆

ふるさとの山の梢をさそひて嵐よりのぬる雪のあけぼの

人こそ百首うたのさわつくよ

亀山

太上天皇

かすめるもまつ見ぬ人をさそひてはなほうぐひす深宮

師継

前大臣

雁乃面ハつもりもやらぬ清て空にのこる雪ぬ宿

實經

お岡口左大臣　一条

後深草

建長六年三首愛合ハ當

後深草

院ノ将門侍

ふる宮ハ雪なりとも岩ぬ花ぬ春ぬ春ぬ

子五百番歌合ハ

源具親朝臣

雪風や梅の匂ひをさそふらん

春よりハ山里ぬ梅ハ咲ぬ

檜大納言家

梅ノ花ハ雪や雪ぬ花乃たわ人のうん

位ハおもしろく乃時ハ人のおのこも宮中梅と

いろふかとつとまつけるたいくみ

太上天皇

おもてをもつるれ梅の枝なおなを色ふかき春の淵雲

前大納言良教

咲よりは頃の梅の色みてくれなる雲の春風の吹

建保四年百首奇なりとて

西園寺入道前太政大臣（公經）

春風やおもむくまゝ梅の花咲よ枝よ雲を上りて

前中納言

西行法師

まつ人の心ひとつにそゆるしける宮ゐ河つゝ春のあるを

千五百番歌合よ

清くにみやみ山とうゝ山ゆ春雲をあ

ゐ菜とよませ給ける

皆多院御製

ちゝ人の袖にそゆる新人をうゝ山野の雲はわ宮

寛治二年（八十七）後源院よ百首奇なりける時

御名菜を

前内大臣（基家）

石上布野の沢乃沢ゝ雲やゝ山とつれ沢ゝ

前ゝ

源人ゝ

今ゝわゝ雲よりぬとゝけるゝの下もしいゝく時人のゝの

ゝ

太神宮御製

野外霞

きえぬとも霞のつまをこそとめ武蔵野の原

建保二年四月歌合られ侍りける時用

うらを

お中納言家

さなりて武蔵野の野辺をのれさへ霞よたちそめおけりの

洞院摂政家百首寄霞

西園寺入道前太政大臣

神代より霞をつくへ隔ぬる山田の原の明方の

後三位行能

梅弓矢野乃神山霞ゆけて霞ぬ空なるけふ乃月

亀山

文永四年内裏詩歌合られ侍時春日

前大納言為氏

印山

ちるはなを春のとはそとみるけて霞ぬ空なる山乃月

右兵衛督泰氏

春宮御中よ

やまのうちのうちふるもしらぬ山乃とれわれわれうまれ

前大納言為家

ふかぬ乃ふかぬ山もまきれいりもて霞の衣乃紙

文永二年七月白河殿にて人々歌をさしつ

て七百首つかうまつる時滝霞を

山階入道左大臣 實雄

此上ハ雲にたくへてこそうかみて後乃本行の歌

名所百首哥たてまつりける時

僧正行意

伊勢乃海ちひろのはまにひろふとも今ハ何の(?)波の原あるゝ伊勢の

あこの浦に寄(?)るそよみ(?)かな

道因法師

さゝ(?)しの浦乃風もはけしき夜半ハ霧そ浪に立かはりける

海邊霞といふ事を

源俊頼朝臣

春霞たなひく浦ハへたつれと磯うつ波の音そきこゆる

葦(?)浦浦といふ事を　藤原隆信朝臣

よさの浦乃霧もはれゆく絶まより橋立かけて松乃村立

題しらす　藤原為世(?)朝臣

立のほる霧は浪を埋(?)まて磯邊の松にかゝる浦風

中務卿宗尊親王

浦ちかき汀の波の音れ夕立(?)は入日をかへすわかの浦山

弘(亀山)長元年百首哥めしける時

常磐井入道前太政大臣(實氏)

みちくれは浪路ちかくそ成にけりよそに見えしハ遠さき浦の洲崎

建長二年詩哥を合られける時

[illegible]

[illegible]

寒路柳絮といふことを

前関白左大臣　一条

枝うちそ柳うちそふ春雨の

蓬保四年内裏百番歌合よ

雨関白左大臣

春柳乃糸は緑よりわけそめ

雨中柳とはるかを深

[illegible]

春柳の糸にはるかを

[illegible]

六条入道前右大臣　頼実

梅花ふかうしの柳ちらはあかりはいかはよとまちくらの

建長六年三首歌合よ梅

後嵯峨院御製

神垣のしらくもかとまがふまで紅のそめ初はさけ梅の花

春宮中納言　前大納言隆季

物思梅乃うち枝ハ見しの風よりくを

源よ十首歌よみ侍りけるよ梅風とはるかを

山階入道左大臣

梅の香ハ花ちるき里色白つきけるの夕風

建長六年三首歌合に梅

前中納言資平

梅花ふかくにほひてまがきの内人けうとくなるこのごろ

藤原定門（博子）院内侍

梅の戸をあけて春をまつ人に花ぞ匂へとこの人ぞ

里に出る人のとまりをとはばいかに梅の花折

てつたへまし

月花門院（綜子）

色ぞ色ぞ人なつかしむ花の山をきそそ

梅とはいふとしらずとは

摂政太政大臣

誰かはしりとをしむ春の山の梅も書をこそ

暁の鶯とはいふものを　藤原信実朝臣

あかつきのうぐひすとはいはまくに春はいとなる

光明峯寺入道前摂政太政大臣（道家）

行くとなく家は海のかりがねの今はあらしの

百とせのなかのうつり時　入道二品親王性助

立わかる家へとそくる色ぞ山さそふ春の

帰鴈を　入道親王快

玄旨はつくさるとなれて行方の空に仕ちまさ夕暮ぬる

[illegible]山花と[illegible]を　櫻懸後公通

[illegible]山櫻花のまれなるをしられ

[illegible]　藤原信輔朝臣

しらゆきの[illegible]山をこえ[illegible]花の枝をかさねつるかな

冷泉太政大臣家山乃花さかりなりけるのそば

[illegible]

[illegible]院少將内侍

[illegible]

弘長元年百首　前大納言為家

[illegible]乃色に[illegible]を櫻花さかぬ[illegible]山風

題不知　順徳院御製

櫻花さくとみまがふ[illegible]の[illegible]

建保四年百首　[illegible]

[illegible]山[illegible]

道助法親王家五十首　藤原雅經

山花

櫻さく山を霞のこめたれば[illegible]

建保三年五月廿日　春山朝

山姫の霞の袖や白妙の花の衣を裁ちかさねつる

花の中に　　前関白太政大臣　基

雲のうへの春の桜をいつの日の空もうつろふ花の色

紅の衣ぬぎかへ山さくら夕日うつろふ色ぞうつれる

雅成親王

桜色に霞わたるこの山の花の衣を春の風吹く

春山春雨と題する歌

中務卿宮雅成親王

花の名にそむくもうすき白妙の山ぢの雪の山路入るたれ

家霞花と咲くらんを須てつくづくと

前関白太政大臣　公親

とのゝ風のてなら花ぬのうつくしき雲ぬきの山ぢ

文永四年四裏詩合に春日雪山

お大納言良教

風ぬ吹く木ぬ道いとゝ花ぬ咲き志ぬ山ぢ

前大納言為氏

春の雪ぬ降ぬ朝ぬ

前内大臣　通光

華ぬとそみゆるまてに桜花ちる山のはにかゝる月影

大納言通方花見侍りける時伯耆守女房

まもらひて月あかき夜大炊殿の花見に使

かけるときをこしめしてつかはされける

土御門院御製

[illegible]花を月にまかせても

京極前関白家肥後

まれにきてまれにやとる月のゆくへを花にまかせてあかす

後鳥羽院御製

春の夜は[illegible]山里の花にまかせてあかす夜の月

續拾遺和歌集巻第二

春哥下

題しらす　　従二位家隆

春くれは桜か花にさきたちて柳のいとさへそ緑なりける

千五百番哥合に　　皇太后宮大夫俊成

白妙にゆふかけてけり榊葉に桜さきたるあまのかく山

守覚法親王家に五十首哥よみ侍りける時

よしの山花のさかりやけふならん空さへにほふ嶺のしら雲

花哥の中に　　藤原隆祐朝臣

山桜[illegible]衣乃花染の袖

山階入道左大臣家乃十首会より寄桜花

権中納言公孝

ちる神もうらみぬらんと桜花匂ふ春の雪の夕暮

文永二年七月白河殿歌合に桜とさくて

て七百首たてまつりし時桜花

とど

木のもとにかをる日数はつもれども人の花をうえ

ぬ嘆かな

吹風乃ちるを白ひとをうらみて行春さくあの花の恨る

平忠盛朝臣

いつとも春はをしみそめけりさくら花よりはなれて

平春時朝臣

ちりぬるとはなのうらみをねもあらぬ春のゝ雲

寛治元年十首歌合に山花

春の来花の枝にかをるかぜ桜をうつす白雪の山

弘長二年四裏百首歌時おなじ心を

前大納言為氏

吉野山いくよの春をかをりぬるはなの人の花とやしらまし

百首歌たてまつりし時

権大納言経任

今もさくらむすびつけたる枝に
門ちかハ桜とめられるようにてなりける

兼大納言資季

九重にはちる宿ゝ桜ゆへ
常盤で宮家乃ゝ
ゝ

光明寺入道前関白太政

いつまでかゝ人をまつさゝ桜宿ゝ
見ぬ日をとゝ
ゝ

中務卿親王

春ゝ来ぬ人をまつ花とのゝ
ゝ

按察使院御製

ひゝ
ちぬまハ
なの
ゝ

前内大臣 基

ちぬまハ
ゝ

院参内侍

なの
ゝ

西行法師

年
ゝ

平重時朝臣

さゝ
ゝ

道助法親王家五十首歌よ山花

参議雅経

おもかけにいとゝ春なる梅花さく花にまがへたる雪の色を

藤原為世卿

百首歌たてまつりし時

風のうへ雪にまがへし花のうちよりやこゝに梅のかをるらん

建保四年内裏百番歌合よ

山

ちりぬるかをうしなくなる梅の花

従二位家隆

文永四年内裏詩歌合よ

雲

雲のうへにかをるはなの梅の花

従二位為家

月

月ぞやどりてとゝ山の梅の花

建長六年三首歌合よ

梅

春の中にかをる雅言

花

花ぞ見ぬ中ふ

従三位知家

山

山ぢうしの花を吹風よ宮にきりもまがへる

雪

雪山花といろ心を

従二位成實

梅色

梅色の雪よりそこの山風よ花の梅のかをるまぎれん

鶯

鶯

参議雅経

霞

霞の底に春の梅のかをるまぎれに花とみるまで山霞

建仁寺五十首歌奉りし時

前大僧正慈鎮

ときの松山も嵐の波のたちかへるなり

宮内卿乃花をとへとく

藤原基俊

人をまつ秋やまちつる山桜乃所切りもあらしん

百首の中に

武蔵国親王

春もすぎ夏の来ぬれば花のちるをみて

西園寺の道前太政大臣乃百首歌の中

信實朝臣

百練抄云閏九月十七日甲辰上皇御幸吹田殿大宮院同御幸七ヶ日可被召湯山御湯云々

やまもとの春の夕の月ちるさくる間の桜花かな

建長三年吹田にて十首歌奉りしに

前大納言為氏

立ぬとて春たつ山桜やはりとて花の散ぬる

春哥の中に

お中納言通藤

夕されば野辺の秋風身にしみて鶉なく

紅葉乃花を見てよめる

摂中納言通俊

散ぬれば花のかをとて山路にぞ

澄覚法親王

誰ゆへにあはれなりし山路とて秋とはいはす庭に花の散らん

庭落花といふことをよませ給ひける　太上天皇

とはれこそ散れ花の盛なれ木の本風も庭を払ふな　句ひは

東イ
西山なる寺に花見に詣りてよみ侍りける

入道内大臣　源通成　大納言通方男

山桜ちるを何か惜しまん嵐吹く情しる人をまちける世

中務卿宗尊親王家の百首哥に

前左兵衛督教定

待ちえたる花をもみえし山桜あらしの庭の跡の雪

百首哥めしける時　春宮大夫実兼

散らんまで後のわかれも志賀の都の花の白雲

宝治二年百首哥めしけるに落花

皇太后宮大夫俊成女

茂りても桜は宮と見つるかな誰住みすてし庭を花とはいふらん

弘長三年内裏百首哥たてまつりし時庭上落花

権中納言経平

よそ人のまたれし物を庭の面におもはすちれる桜かな

堀河院御時鳥羽殿にて池上花といふことを講せられけるに　大納言俊明

うちよりの浮舟の花にかれはてぬる池に宿れる月

建保二年始百合より河上花

吉野河宮けの水の澄ぬ色にかすみの下風

春百合の中に

うれ河流のうへうつる山さくら咲ぬる色に百合の花ちる

百首歌中に

俊頼朝臣

はくるれの花のさかりやこれの河なれて例と咲つらん

建保四年四裏百番歌合より

雲雀井入道前太政大臣

伯耆川花乃みなわのきしそよ出あつそせ雲波

山川よ吉野の桜いかりあらし風よこの花乃出る見

俊成卿

散花よせてのぼりやせうらむ山川

法二位行家

あ川のみ出うれなる花を乃うつて乃つ若川乃水

入道二品親王道助

吹風ハ屋ふきもとゝれ吾川の花乃川乃水

藤原雅経朝臣

うらすゑふかき風のつくさせて散ぬる花を誘はばこん

院弁内侍

咲ぬるは花のあるかぎりそとやせよ海ぬ吉野山風

京極入道前関白宮内卿家百首

ふるさとは春の花とぞ思ふらん

肥後

立ちぬ家そつゝき山さくら風ふかぬ春のうゝみと

花山院花の盛をたれかはとはまつらく

尋花とゆくらんかくもあらぬ何

前大納言公任

かゝるまていかゝ花をとゝめあまつ雲はいかゝ

百そ今ゝ世ゝ中よ

順徳院御製

宮ゝのゝ物ゝ山色いかゝ河れて春深ゝ花ゝ紅

弘長二年内裏百首ゝ中ゝ春月

お大納言為氏

春の夜ゝ霞のまゝゝ山のゝ陰ゝ月ゝ

文永二年七月白河殿ゝ人ゝ歌ゝ合ゝ

七百ゝ首ゝ内ゝ浦ゝ春月

坂源頼院御製

所うしかりけるこゝろの月あはれ海ゝ今まさるを都

深秋雲月と云題をよめる

前関白左大臣　一条

晴れまさりゆくとなくさめて月よ秋をしる

常盤井入道前太政大臣

もゝしらも

行末へきやのうつれる新しきみをかゝるまれなる月

前代

法二位家潔

長くれはうき田の葉よりこゝろ行のたちかへる

光俊朝臣

とゝらぬのゝうゝ水をまれもて長月河のすゑにうつる

道助法親王家五十首歌中に河歌を

吉野川おちたぎる水の神ゝ目にて浪まうけ今宵の山吹

山之位知家

おもてうえ事に知き山吹の花のうへにそのゝ川浪

惟明親王

鄙うす

波人ゝ沢

波ゝさ井その山吹のさかりにて花のさかりの人よとゝはは

源倉左大臣

むもうる井ゝの河風吹かりみなとにうゝ山吹の花

弘長元年百首歌時歌を

前大納言為家

萩

いはつたの花さへ見のはしたかの山の末をとをしてうつる萩の

寶治二年百首歌のうちけふそよはつ嵐

俊成卿女

ぬれてうつるもうつるぬれうえの萩しをれ過ぎにしかりそめ

ちかの門院小宰相

いろかへてうつるのはしの萩の花よさくらん

ちかの門大臣通親

前中納言定家

萩乃花去てくれぬる夜のあけぬらん

寶治二年百首歌のうちに暮去

前内大臣 基

里の寺おれ〻ゆくを我うへの月を淋しの池

お中納言定家

つまとまく言ふ人を別て行るまつすゝの原

去れ

續拾遺和歌集巻第三

夏哥

寛治二年百首哥めしけるに首夏の心を　　堀川院御製

わむのうしはかりてくつまとりかなる裏衣かな　　山階入道左大臣

今そやと人の問ふにかつ鳴てさなから時の過むと

遠樹につけて人のもとにつかはしける　　赤染衛門

山ちかき人いかにとか時鳥なれはかはなかぬなる

郭公をきくとはなしに　　衣笠内大臣家良

郭公なくこゑをきくとはなしに　　従三位為子

我さとに夏かきさはに成ぬれは　　平政村朝臣

郭公なくこゑをきくとはなしに　　前大納言為家

なつ衣なれぬ袖にはあらねとも　　源兼氏朝臣

なれてはまつの月の新しき

待郭公とはなしに

右之歌　そせい
今こんといひしはかりに
長月の有明の月を
まちいてつるかな

有明の月まちたの山郭公のかりし契なりけり

杜鵑を　中務卿宗尊親王

なきよひそこよひも明ぬ何となくたゝなをさりに待とせしまに

右近大将通基

たつねきてきくも山路に声はかり心ありけるのかたによかる

右兵衛督基氏

有人のよしなかりに郭公まそてくさの細道なれ

右大臣に侍りける時家に百首哥よませ侍りけるに

杜鵑を　後法性寺入道前関白太政大臣（兼實）

宿ことに誰の人ねよほとゝきす思ひそ我まつそ聞らん

夏哥の中に　大納言経信

ゆふされは人もやわたる郭公みねよりつけて過ぬなるかな

和泉式部

まちかねて物思ふ人はとのみや山郭公ましてなくらん

従二位家隆

ある人の夜をあかしつゝ待こゝろ卯月の月の山の端の雲

光俊朝臣

あらさりし誰をかけての時鳥ありなくは初音なるらん

信實朝臣

一声はおもひつるかに郭公我もききつや人もききけん

同郭公といふことを藤原隆博朝臣
一声たがわぬ郭公ほとゝぎすきくあはれてはるまさ
遠字明月といふことを
源道濟
ちゝ郭公一声よりなくまたくらしつる
醍醐入道前太政大臣
さいらす
郭公とゝ一声とちりとりの思ひのゝ友はまの用
板島相宗朝臣
なくほとゝぎすのこゑはひとりのみ
文治六年女御入内の屏風
後京極摂政前太政大臣 良平
故法性寺入道前関白右大臣よ俗名忠通
百首のうちよ郭公
後惠法師
ほとゝぎすなくこゑ物はるすゝ山ほりを
夏哥の中に
宰相法師
山ほとゝぎすなく郭公なかはあそ玉八よろ
法之位相改
郭公おとゝ名なかはあ花の梢花八秋ゝ

卯月のつごもりの日法印より
青侍にて
葛蒲を
あやめ草一枝にて
百首
いつやめ草
土御門
正治二年
太上天皇
前大納言隆房

ほよ出し枝とはすゑのかうべつゆ
建保二年五首
前中納言定家
あむ代のあやめ草
百首
前内大臣 師
横雲かけ
寅治元年十首
右大将通忠
横雲かけ
如覚法師

雲かくれたる月のうちかすみてとく晴けるか

うくるすゆり出くるけさの春の月毎の元

前内大臣大臣一条

及ひなせハ今ハ程の山里に住見のそれかの月毎の元

百首寄月時

春宮大夫實兼

時やらぬ日数をそへて山のすそもうき物の月毎の元

仏長元年百首寄月時五月雨を

夜半内大臣

ゆきて年ふるまこそ当はしめの里ハ物の月毎の元

同仁和寺の歌百首歌よみ侍りける

前大納言為家

題しらず

みかの原のそれひろまるうき物の月毎の元

為忠資朝臣

久のそて岩波さそふ山川の月毎の元

百首寄月時

伯耆雅有

六月毎ハ河乃なかれてとまる三ツ乃枝

前右兵衛督資盛家三の合に六月雨

白大納言実俊歌

六月毎ハやそうちかきを河原ハ月ハ長ハ物のそ月毎の元

禊河とゝか世治らなり

後陽成院御製

夕やミにはきこえてみとさらへ水か禊にかみゆる

同五月雨（庚和四）

権大納言公実

みさほちの禊るそ堀河郭公おもひし月も月しかなれ

百首歌奉りしつかへ

太上天皇

あらしやの風ふく夜のみかくれのはなまかき夜の月

権僧正寛完

すゞしさはわすれぬまゝ水のかけみつ夏の夜の月

依月夜涼といふ心を

修理大夫顕季

かくむすぶ六月なかはの夜半の月のかけに風ぞ吹る

大納言通方人々すゝめて八幡宮にて哥合し

侍りけるに夏涼月　源有長朝臣

夜もすがら池のさゝかけ移りて夜なかすゝしき秋の月かな

寶治百首の歌の中に河夏月

藻壁門院但馬

まなき扇の風も忘られて関もる月に影涼しさ

人とみ古今を歌よみもせて侍りける時長哥

法京覚寛

夏草のしげるあるのうら枯はやそのもりの夏草の

賓法百そうを奉りける時おなじこと

入道二品親王道助

夏草にうづまさゆりはなのつゆ枯はてぬ露の逸

前大納言資季

いつのそらの月中の今さらにぬれまさりけるあまの袖

順徳

義久元年四裏歌合に水辺夏草

信實朝臣

とのつくれる野中の清水にうつりける夏草

ちかつ法師製

夏草のしげりあるあるあるものをのもとに花ぞ咲

家に百そうのうみ侍りける

中務卿宗尊親王

ふるの里ひろの清ゆく堂の前の夏草のうへにうつる

如願法師

千載集に伊勢物語のこと侍りけるとかきつけてもとめて人をとこ〳〳

浦風とともに

ちりぬるとあるは新院のむかしはまのあれてもの堂

西三位知家

ちりぬ

苔乃やのあるまれなるいまの夏草のうれしかりける

ちり

蛍火乱飛秋已近といふ事を

土御門院御製

小篠原志のに乱れてとふ蛍今いくよとか秋を待らん

寶治百首歌よませ給ける時夕立

前内大臣基

おちかたの夕立さそふ住吉の浦のむかひにかゝる村雲

おなし心を　寂蓮法師

谷河のなかれをみてもしられけり雲ゐる峯の夕立の空

前関白左大臣一条

かきくもる程もなく過る村雲にやかて晴行夕立の空

後鳥羽院御製

夕立のはれ行峯の木のまより入日涼しき露の玉さゝ

百首歌よませ給ける時　式乾門院御匣

白妙乃衣ほす乃露そさへ涼しかるらん庭の若草

夏歌中に　前右兵衛督為教

露かゝる庭のあさちに風立て名残すゝしき夕立の空

参議雅經

露まよふ日影にひく浅茅生のをのつから夏は夕かせ

弘長三年内裏百首歌よませ給ける時　杜蟬

前大納言為氏

行りくへく移よるくに世のそれ名有とみきき衣とのもの

土御門

建仁元年五十首会もとり時

前大僧正慈円

夕されい野中の松乃下吹をゝ松風さそふ白くもの

細流の水をせ

夏ゆき板井乃水ハ松風ゆゑ

建保四年四月裏百首会よ

前中納言定家

夏ゆゑ風ハ吹ゝ河風よ岩波さそふ水の音

同年百首会より

西園寺入道前太政大臣

御板ゆゑ水音ハ

水音の音にたゝしを

松風ゆゑ

續拾遺和歌集巻第四

秋哥上

人〻小百首歌めされつゝよ　太上天皇

とはゝゝ秋と風乃吾袖山をたに分かれもこそ

初雁乃心地　光明峯寺入道前関白太政大臣

宮さゝなみ染むの秋を寒ぬるゝ秋の地風

寶治百首歌　太宰権帥為氏

蟬の羽乃木も色ふかき夏衣うすき秋ぬるゝ

道助法親王家五十首歌　後三位行能

風の吾も消なるゝ秋ぬるゝ

うゝと萩のうへ葉も吾位て神よ

光明峯寺入道前関白太政大臣百首歌　院少将内侍

色乃染ぬとゝもゝ津の国ぬ次第秋のゝ風

初秋乃心をゝ

後深草院御製

けてもふるとをるる松陰の岩井もわかぬ秋ぞふるる

寛治元年十首之会ニ初秋風　右ヲ大将通忠

墨ぬりやうもつねの松風の分かしもはなれぬ秋を来に

仏長元年百首歌　前内大臣　基

いとのりをあらの浦の松乃ととまもしらぬ妹の初風

妹背の中　前大僧正隆弁

清ゝ風わたるあり天川うさぎの浪ハ秋やなるらん

弘長三年内裏百首　権中納言為平

織女乃ゝ衣の秋の夕暮ハあはぬのこゝろ思ひ絶らん

七月七日いふ歌　城河院中文上総

契きんとゝろ乃狂も忘ぬ物の心合の恋ハ深ゝ

七夕　権大納言實家

わさゝぬ契ゝ乃ゝ天河あはせ衣ハ一夜なれども

年ふまつ　洛理大文隆康

百とせの海せゝまゝ川あをいちゝさわゝ乃れ

後鳥羽院御製

ひかりのかさしはもゝ天河あふぎはなれぬ夏の夜の月

久安百首歌

待賢門院堀河

かさねくもあねごひやまさるむとゝぬ立ぬ天のもとゝ

七夕後朝の心を

法橋顕昭

ちゝ河とゝぬの波ゝ七夕乃ぬしはむのゝもやうん

入道二品親王家五十首歌

今はわれ涙をいつゝと萩の葉ゝ秋の夕風ぞ吹

弘長元年百首歌

津守國助

常磐井入道前太政大臣

萩乃葉ゝ風まちなの夕暮ゝ吹つまうて人のとゝ

名月院に対前載合ゝ

源理文顕季

妹乃袖ハ人まつらもゝ付ぬ萩の葉風ゝおとゝれぬ

彩ら歌

順徳院御製

待人の入ぬ涙のもゝ海ゝ萩ゝ秋風そ

名所百首歌

けつゝ

しゝ女ゝうゝもゝ野ゝ萩ゝ

建保三年五首歌合ゝ

秋

出はらの○も我方ひとりの秋風よ　皇太后宮大夫俊成女

秋哥の中に　前関白太政大臣（基忠）　摩耶

夕されば我方ひとつの秋の風　袖にあまねぬ物思ひもなし

澄覚法親王

ふるさとなりて物をこそおもふ　秋の空ハ

述懐百首の中に　皇太后宮大夫俊成

荻の葉のうらめづらしく思ひて　袖ハ我をぞ秋ハ来ける

新しき　長覚法師

吹ちらす　荻の葉に白く荻の葉さそふ　袖ハ我をぞ秋ハ来ける

みちのくに

行脚僧といふ人を　藤原隆祐朝臣

袖の人の家をとふ人をまけるかおもかげ　秋風ぞふく

建保四年百番歌合に　順徳院御製

夕ぐれはまくさの秋の花すすきそよぐ袖をそよぐ

秋の中に　従二位家隆

袖の内を秋の風ぞ吹ぬ　ちるはなすすきの花の風ぞ吹ぬる

建長二年八月十五夜歌合に

野辺花　　前関白太政　師

萩らのはぬはふみをんうつるなくいさんの野べの秋の夕　　雅

蘇芳といふことを　　権中納言公守

さをぬふんをとゝ萩えん小家もあるうら野の夕風

　　ちかつ院内裏

　　紅葉

さをぬふんうつる色の紅葉ゆ下染もまさて家の前の萩

野花移色といふことを　　前太政大臣

　　花原院永朝臣

心あらて家やとらむ紅葉ゆ下もの白ひて面うる秋萩の

　　なか

さをぬふんとうも色合うけり

文治百首の内下染も色みて物りて面うる紅葉の花

野鹿といふ心を　　従三位為兼

妻さりてあるのこ萩とうつりやうつる色よ鹿の鳴ん

入道二品親王家五十首歌よりけり河

色うつる小萩ゆりて小家ちかて秋の野風よを鹿の鳴也

　　春宮大夫実兼

風前鹿といふことを　　津守国冬

ひさ里ゆとゝ野の音よ鹿の鳴て小萩色つく秋風ゆ吹

　　蓮生法師

雁字小

燈を紙の覆てちりぬる夕霧の袖にうつる

基俊

はるかなる海の面や松をへてふきこしかぜのとけきなるかな

院少将内侍

いふ吹燈のゆくへ風なれて庵の窓の方にいとしも

経之法光院

夏ぬるとみつ湯のとのゐる鹿のなれ海ぬ嶋をこしこ

建保四年百首歌

秋をのみ惜ぬ人のなれば秋のなかばの月のかげ

題不知

中太后宮大夫後鳥羽

秋風の外山の鹿にあらそ窓吹はらふ小野の萩原

建長三年九月十三夜十首会に尋山鹿

入道前太后

燈を捨て山のおくにふ鹿ぬ夕ぬ鹿のなかぬ

夜鹿といふことをよめる

従二位成良

高砂の松の嵐ぬ秋ぬ山にそ月ぬ夕ぬ鹿の声

建長二年九月詩歌合に山中秋興

入道内大臣

三門の山風吹き月新しき秋夜の哀れ

鳥羽殿御製

ながらへば秋山よりなほ恋しきは紅葉の下の

白河

兼盧二年門裏の谷の鹿

指大納言公実

常盤山のおのへより鹿なくなりと言へば

萩原為朝卿

秋萩の花なるあり地蔵のうすみどりなる

仏長久寺百首の内

前大納言成

今よりの後りかは秋風吹りかはりてこそ

秋の夕暮

覚仁法親王

いまよりは山の月を待ちて秋風さむし成田山

雪天中雁と山ろの

太上天皇

秋さらばおりわかれてなれのやどに雁のなくこえ

藤隆門院御歌

ながられ

夕されば雪とぞ見なる秋風さむしとや藤原

信實朝臣

雨をまつ夕雲ちぬ山ぶかし曲とさしとやさあん

百首歌よみし時　権僧正実伊

村雨乃はれゆくまゝにかたよりて夕日にうつる秋の山かせ

影しらす　普光園入道前関白左大臣（良実）

なかせハ山乃かせにあに雲晴て夕日にむかふ松の山立

　　　　　堀河左大臣（頼宗）

ことハりにさびしき秋の夕ぐれのやまのおく乃山本

百首歌よみし時　藤原為世朝臣

あはれなることにさびしき夕ぐれのあはれにそまる秋の夕暮

嫉哥乃中に　常盤井入道前太政大臣

外山の峯のつゐ日よりも夕暮の門沼

弘長元年百首歌たてまつりし時

前大納言為家

朝きりをわけし外山ハ暮はてゝぬれてぬりとをゝる秋の河音

影しらす　中務卿宗尊親王

松よりもさびしき人の袖みて夕暮さびしき嫉乃門沼

百首哥乃中に　前中納言定家

かなしくは我もむかしハ雲こえておもひやの里小林風ぞふく

文永二年八月十五夜歌合に夕月

式乾門院御匣

ゆふなきの空にさびしきせめてみ秋乃夜の月

林間の中山　　正三位知家

吹しほる袖の松風に秋ふけて出るそれの山の端乃月

建長二年八月十五夜鳥羽殿哥合に月前風

院少将内侍

山乃端を出てさやけき月に秋ふかくそよく松風さえて

題しらす

後鳥羽院御製

天の原空や吹らむ松風の山のはちかく出る月影

中納言教良

山端より雲吹はらふ松風にやそくなる遠き山の端の月

九月十三夜五首哥に山月

春宮大夫實兼

足引の山乃たかねくまなくや晴ゆくまに出る月かな

題しらす

平時村

むら雲のかゝると見えし山乃端にけふはのこらすすめる月影

秋乃比は稲葉もそよとなりにけり

前中納言資實

なかむれは八坂の空はれて雲をあらそふ出る山のはの月

秋依月勝といふ心を

後嵯峨院御製

わきてこの心からには秋ならても木の間の月のさやけかりけれ

古今秋上讀人しらす
このまよりもりくる月の
かけみれは心つくしの
秋はきにけり

建長二年九月十二日宴会ハ名所月

冷泉大納言（公相）

○とてひかりさへかはらぬ山みねのよの月

月宴中ハ　中務宮　親王

まうしたいたりたんそうの月よりかくらの景物宮

文永二年八月十五日宴所合ハ俳句月

従二位ハ家

今ハいにしへの名所庭もあれてあらく海ちかく月ハ

ゆ[illegible]

右大臣（忠教）

昔しのばれよ松の中なる月にさしかはすこゑ[illegible]

駒迎を　仮法源院ノ製

ものとてやの上のくもみ松のうしろ月の詠

西二位知家

夕くれの月しろきに関こえて木ゝのしたかさきりうれ詠

お関白一条家百首ハ関月

前大納言為家

あ[illegible]

関路月と題ハ少ハ尤京変影浦

逢坂の関の清水のなかれ月ハいそ[illegible]月ハ新とこめ

續拾遺和歌集巻第五

秋哥下

秋ふかき　信實朝臣

月新もゆきもよりなれぬ橋姫の袖やさえまさるらん

太宰帥師房卿

橋姫のうつく袖も寒きまに月はさえまさるらん

人しれぬさとりて宮つかへはそうつ

月前眺望

月前眺望をたのもうけ

太上天皇

嵐山月いけてはせの岸うちくもるなる

文永五年九月十三夜白河殿の首尾のあそせう

河水澄月　前大納言為氏

新やとす月はうつもひうつてやうちもとめる秋の川

侍従結法

ちりつもる紅葉ゆゑ立田河月も水の秋にみえけり

文永六年八月十六夜問裏合に河月似水

典侍親子朝臣

立田河岩こす浪のうつるさえの月よ

右大臣兼経

月前の中よ

てる月のひかりさやかなる山川乃水

建保二年秋十首会なりける時

右近衛源実朝

千五百番会よ　　野宮左大臣（公継）

花ゆゑ山路来ましかは月やとし人に見せまし

新勅撰

平政村朝臣

ながめあくかたの空よりくる雲の月をそ

秋はつる中の海の湊の浦風よ吹ける

惟宗忠景

平清時

ふるひやろ浦の秋の夕ぐれ

文永七年八月十五夜和歌所月

海月といふことを

右馬頭藤実冬

さ汐みてはるる月の新さえて波こす浦の松風そ吹

弘長二年同百首会なりける時　浦月

お大納言為氏

波すゑの海や用の戸をくる立浪と月よ吹こす松の浦風

実明卿ら入道前摂政家百首会よ

名所月

従三位民部卿藤原為氏

清見ゑ月は元小世界なれ松のうら波

月前中小　　登蓮法師

きよみつ月もしら秋の山やハ嶺もたえなの煙也

弘長元年百首会の時月を

衣笠内大臣

秋さむなるいく田の杜乃杜風よこの杜ぬ里も月やうつらん

文永五年八月十五夜内裏百首会に田家見

月　　法二位行家

いなさしてあれもやの杜風よ稲ぬ秋をさしこそそろ月

建長三年九月十三夜十首の会に田家月

前内大臣　　師

秋さわぎ山田の庵月新米ぬそを四人もの

秋ぬ虫　　安部つ虎四郎

風乃音も次まさりなわさてこそ秋のよの月

前摂政太政大臣

月みくも姿やいとと無こ山てもの分ぬ月みて秋

お大納言為氏

秋さへて壹ぬ山ぬ月いかへとなかの新ぬ月に為て

建長三年八月十五夜の殿の会に月前

風　　法成寺院御歌

いすへの風もうつぬ秋若ハすみ月てこそ月もうつ

老の後月をみてよみ給ける

皇太后宮大夫俊成

かゝる山道八十年の秋もおもえたり貴ばさへや月ハみきらん

式子内親王

御遠も我にや人もそもまちぬれもまちぬ月の影かハ

弘長元年百首歌奉りける時月

衣笠内大臣

ゆくきこゆる橋も白妙の雲ゐにうつる秋の月影

嘉ゝ月五十首歌よみ侍けるに

後京極摂政前太政大臣

けふもこそ見しかハ秋の夜の月も高しと残る白雲

建保百首歌奉りける時

後久我太政大臣

月かけ高山より出て家の夜あかりも露にや秋ハ霞にかかり

建長三年吹田にて十首歌奉りける時秋歌

前大納言為家

なかなかに何かなき山の端もなき秋の人にかかる秋の霧の月

題しらず

法印定圓

更行の高山の端の影をこえておもひきめて移ろふ月影

如願法師

煙の末もゆるされもの山の端の影に映る有明乃月

為代六百番歌合ニ　後京極摂政前太政大臣

山ちかき門田の稲の秋風に　夕日さすなり時雨ふるらし

定家朝臣

実明卿家百首歌の内

中ノ

秋の田のかりほの庵の苫をあらみ　我衣手は露にぬれつつ

前関白太政大臣

寛治百首歌に秋田を

夕日さす門田の稲の秋風に　山陰入道左大臣

遠ちかの里の夕さりかぜ

山陰入道左大臣

家に田家秋望

お大納言

氏

霧深乃おくてのいなを付てかり落ぬる秋の山風

権大納言家長

炉辺秋中小

小山田の庵ちかき門の夜てハ家も秋をしるらん

摂政関白

持衣乃ふを

水鶏院内裏

さらぬ秋の山乃ゆふ露すさまじき衣月ハ

後京極摂政太政大臣

ゆふ人さそ秋の旅人物ものて邪乃月ハ

家ハ五十首歌ゆふ

入道二品親王性助

ゆふ秋ハ家ハ人さ山き門新ハ

秋ハ衣うら

[illegible]

太宰中將經氣

秋風の身にたとうとは里人やまれに言つまて衣うつ

光明寺入道前摂政の奇合に風お摂

衣　　洞院摂政左大臣

なくなくもうつるかなやの秋風とをのみ衣ぬとうつ衣ぬ

演摂政とはとを　祝部成賢

浪たちぬ沖の漁人の浦風よ[illegible]もさむく衣うつ也

嫁方中に　　権僧正実伊

浦風やちとさむしうつ衣　　[illegible]人有夫くなを衣うつ

津守國平

[illegible]

野亭摂政とはとを　　摂家侍高定

嫁萩乃うつろふ時人乃うつ衣よそれの秋そのの衣うつ

[illegible]　　前内大臣基

いつふきんの道の宿なれ人もるきかさ[illegible]の秋乃村雨

建長三年吹田[illegible]十首会[illegible]時

常盤井入道前太政大臣

さしのぼる芦の[illegible]第よ風[illegible]て入[illegible]ふ[illegible]の村雨

千五百番歌合より　　前中納言定家

[illegible]

秋の月中に　　お内大臣　基

乃ち海のあきらかなる桂風よりつたへて聞すらん

光明寺入道前摂政家　雅世公

わすれ乃ち花のさかりにもやどりて下葉にのこる秋の露

[illegible]

桂風よかぜにもみぢのかりがねの下葉に出て色よりも色

藤出とはるかを　　太宰帥師右卿

山のはもまくまなくよなかの月にぬれぬ雨の夢乃さむ

草枕家乃家海ゆふ月新と移ふしよりて出やらん　　内大臣　基

白河殿七百首哥よ水色菊

[illegible]

みくさにそそもとねてもとの通れあまてをしてふ菊の　　下れ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

遠長六年　亀山殿にて初て五首哥講せられ

きろよ神紅葉ちりよとを

[illegible]

[illegible]

国立公文書館
National Archives of Japan

建長二年九月詩歌合よ山中秋興

前右兵衛督為教

三笠山秋の末葉にいろとりそめまくもかしこき紅葉をたまはるもう

太上天皇

ちはやぶる神のいかきとそなはてんちかの宮の山風

前大僧正円爽哥合よ庭の紅葉

おほ中納言定家

ちるかなしつゆ神のいろ彩りぬる紅葉風とやいろんを

紅葉風とやいろんを

はつ涙袖にはれ紅

はるまてはうれしみちよ深まれる山のうれた末

贈太政大臣長實家哥合よ

左京大夫顕朝

姫ふれる深んをちるぬれぬるれる井の衣よ代もも

秋哥中よ

はつ酒大臣

山姫乃衣の袖やうめんくれる井ふさあるもその社

西園寺公経

後京極摂政おほ大臣

富門ちるみちれるもみてくれる井ゆあるせる白波

千五百番哥合よ

苗代のよわ一次ちくるわさたまくれ行き苗代流ふ

花と紅葉　遠照
絶人のうきえをえらべる
これもとハれかけなく
紅葉ちりかう

光明寺

中原師光卿

白山ぬさいむしのちぬ
平親世人とよ今よ
今ちう

前大僧正道玄

紅葉ちれもて霧そぬ木のぬを彩むけ
名所百首かりもの次ち

順徳院御製

紅田山木葉ゆく松風ふ
遠保四年内裏百番歌合よ

紅葉ちる河を乃藤ちとのとなりてなれ松の色ハ
紅葉流水とゆ
ちをちをゆ

仮三条西大臣 公敬

ちをちゆ紅葉ちれ山ちを
百そ今ち時
とかも河紅葉をうゆ
暮煙のゆを
ゆーうれ彩ちれもをう山中日の新よ緑ちを
光明寺入在前太政大臣

入道二条親王性恵

三ちゆ紅葉ちれ山ちを
ちをちゆ
前大納言為氏

前摂政家教所前よ

お岡白川大臣　一条

[illegible]

[illegible]

衣笠内大臣

[illegible]

西行法師

[illegible]

花を中将公衡

[illegible]

西行百首哥

式子内親王

[illegible]

[illegible]

続拾遺和歌集巻第六

冬哥

初冬乃心

[illegible]

[illegible]

院御製

[illegible]

[illegible]

道助法親王家五十首哥 朝時卿

西三位知教

[illegible]

十五首番哥合

左衛門督

時雨も何うつろひ神無月いかなる時の森のこずえ

小侍従

とうつりてなるうらもとどめぬ初時雨

百首歌中に

春宮大夫實兼

時雨ふる月はまさりて山のもみぢ葉はいとどうすくなりにけり

伯源雅有

おくられぬと山路にまよふ時雨かな

お大納言の家百首歌よ

知願法師

ちるもうくれはつ山のもみぢ葉のうつるはかりの山の時雨

前関白太政大臣一条

冬歌乃中に

晴くもりおなじ空にはあらねとも深山の時雨はいとはれぬる

嘉陽門院歌

山風に時雨ふるとは聞ぬるかな月

菅原左近朝臣

深のこずえ葉もあらぬ神無月時雨ふる

神祇官の時雨の色に

寂蓮法師

神無月ふる時雨にまぬ晴ぬる

平政村朝臣

ちまたの人さはもみぢぬ本葉ふる時雨ふる

左近中将家教

嵐ふく木葉に落る音すれも庭にや村雨しの光

百首哥めされけれは

太上天皇

神無月くもそふやまの梢の色に時雨ゆくなる木葉ちるらん

一 藤原為世朝臣

むら雲にみえて雲の山風に木葉のこらぬふる時雨哉

落葉

中務卿宗尊親王

村雲のはるゝも色もかへて嵐にさそはれける木葉成けり

式乾門院御匣

木からしの風にみたるゝ紅葉やゝ木末の時雨成らん

従三位忠兼

立田山秋いかさなれ色にみて木葉ふる比の時雨哉

弘長元年百首哥奉りし時初冬

前大納言為氏

紅葉ゝ秋の名残をみせてやゝ道とのこさぬ木枯の風

人こゝろをさそひて言つけもなかりしつそら

落葉浮水といふことを

太上天皇

大井川かへらぬ瀬々の色にこそちりかふせく岩波

[illegible] 源具親朝臣

[illegible]

題しらず　土御門院御製

[illegible]

[illegible]

[illegible]

平政長

[illegible]

前右兵衛督為教女

百首歌奉時　前大納言資季

今もかは袖にぬるるは白露もこがれる雲と思ひ入て

惜別親王歌十首　前中納言定家

[illegible]

[illegible]

[illegible]

人もとわやそ四郎の我者ものもとに
[illegible]
[illegible]のあさりに[illegible]
みんしらす
[illegible]の[illegible]
[illegible]
小倉殿
[illegible]れの[illegible]
[illegible]
[illegible]

ちり

ちりぬる

ちはやぶる神の御代にもたつたがわをくくりもかけじとは

夕なる鳥しぶるるこえ

京極殿（佶子）四位

ゆふされば野べの秋風身にしみてうづらなくなり深草の里

をぐらの峰に

京極殿御歌合

照月の影をあらそふ雲もなくはれぬる秋の夜の月

権律師公猷

秋ふかみ入るかたをしたづねてもいとどこころの月をまつかな

後恵法師

ながめつる月のかたぶくあけぬれば

さはらぬ秋のうきねの鶴なれもいかがやうねてむすびあえん

宮秋門院丹後（任子）

かりそめの宿をば神よゆるすらんかりのすがらの夢の夢

四園寺入道前太政大臣

山川のせゝのしがらみ水まきの月のもれぬる

十五番歌合

さえゆけば雲ぞ下ゆく冬の月

前大納言忠良

ちりぬるかたのうらにぞ秋の月

平宣時

ちはやぶる神の御代にかたるなり水の流れの

岩さくの波の立つみなもこそなれやらすゆく川
洞院摂政家百首歌に水を
正二位知家
せゝわたる波のそこさへうもれぬとなほ消ぬべきのこりの
建長四年三首会に河氷
冷泉太政大臣
風ふくゝ波の河波さゆるゆゑ氷にくるせゝの網代も
家をもとゝ
権中納言長房
ゆくえなく家ゆく秋のさゝ枕ゆめのこゑ風の音れ

大江頼重

中務の宮の親王歌の百首所より
権僧正實伊
われゆくゝ宿の梅の花ゆゑ山風にかをるゆむのかゝれつ
建保五年四月廿三日庚申に内々にて
春歌雅經
春風にまきまの花のこゝろ所はのこゝろ新そみ花
光平の中より 法之住為縁
明ゆくゝ春ゆくゝ山風さむ家ゆく
弘長元年百首会にて
前大納言為氏

[illegible]

名所をなりもりの時

おなじ　正義法

志賀の浦なみ立川時雨の中なる宮にぬり山あらの風

建保五年四裏哥合　藤河風

藤原雅経

[illegible]

百首うたのなかに　順徳院御製

山川の水まさるとの面かしらくつりとれるの神宮

前大僧正慈鎮

[illegible]

兼久元年四裏哥合　杜同宮

正二位知家

杜の[illegible]

宮の朝[illegible]

九条[illegible]道良大臣

今[illegible]

洞院摂政家百首　哥　雪

常盤井入道前太政大臣

[illegible]

冬嗣卿中納言　　光仁後胤

[illegible]

[illegible]

藤原雪嶺卿大将

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

八百日ゆくさきの三毎地をかくしてみせ給ふ白雪

覺子

西園寺町院右京夏

雪よりはやくとけの来まそ

きいそん所のつかまつる雪れ山ばくられて給ふ鈴

ふるさと給ふ

周防四位

あるよれをつるも雪れいかりてやそ升よりかる山をなりん

雪浪百首安年ふる時横雪

院少将内侍

九重といかりかるかあるいむ浄瓶のうられ飛をの白雪

西浪百首安年

前中納言定家

まうかれ前安年ふる山をつる雪ふかゆかるとふ山のいれ月

中務卿親房

尼女房あまをとるもて法橋ふまもら侍

安年浪百首小源師光入ふるもて飛をそう

あるひて朔日つをうけ前

前大納言為房卿

あそをそむる人の神ふれ雪と月ふれをふる

大納言通方八幡宮文て言合し侍安年

冬河月

法印信通氏

山乃端ふ月ふれるみをて雪ふふるをるの月

法名明法より冬月五首奇特なる

如願法師

いとなみをとりあつめて神の水より月をかたらく

弘長元年十二月内裏三首会より河水

法花山流金遺前太政大臣（通雅）

冬月をそもうもわれあるかの門ゆせの流乃ほかるえ

人とふ中首奇特なる時

法印覚寛

冬月定日新みてきしなれいかく移るく雲ふかれ

百首奇特時

覚助法親王

法名明法より冬月の秋とをかさ年代雲れ

前大僧正成仲

雲乃底おもひ乃ゆ月遠い我身にをいとまもぬるら

うらはれるをんなるもの

白太后家文後成

約束をかりめ乃身にをあるとをいれてやとらをとる

基俊

いつくまもおもをわうるあ人をほうとあるらけて

年とをへい

続拾遺和歌集巻第七

雜春哥

弘長元年百首歌のなかに初春を

安嘉門院

和歌の浦の松村雨さして道あるかぜと吹いさかり

松の心を

後嵯峨院

いたりなき沖の白波をかぬいて行よ吹ふらん

春宮大夫

雜歌

池水に出るのこの乃まさしく寒あるうまれ世をも

前大納言顕朝

君はなほ名をおもふ山ゆゑよ吉野の里に雪ぞ降れる

山里に雪ぞ降れる

式部門院右京大夫

うしろ山さかり分はそれ明るこれ松雪ぞ

山階入道左大臣乃十首歌よ日松雪

ふるさと

源通氏朝臣

君をまつ日ふる雪の○松れよ忘れて去とも

中位乃局

世乃はる景徳院乃還昇いまゆるされ

ちりもの氏百首歌部にてなもつそよ

皇太后宮大夫俊成

公卿補任云久安元年正月六日従四位下美福門院御給

中納言為兼卿の山路を今更よ庵へとそくなけく袖かな
光をさしうめて還昇仏道はるとなん
寶治百首に分入しつゝよ山庵
従源俊清製
今さらに庵へとそくなけく袖かな
白河殿七百首に分入しつゝよ山庵
前大納言為家
山のとをみなと老よかそとも寄よもれ袖の露の
建保二年内裏歌合に上庵
従二位家隆

新後拾遺雨中のみとをけ山ちるやみて杉
題しらす　平親清女
深風のとともあり山深松のもみてる袖の夕波
法眼性中
みくもとゝれる恋ゝ山の杉の月雲の物ゝ
世ゝ山ゝ
伯ゝ前の梅
従源俊清
わてゝ山みとを人よ梅のうるはしてをしれとそ
後深草
康元ゝ年二月の比ゝ梅事ゝて司年

一代要記云建長二年九月十九日任民部卿康元ゝ年二月二十九日出家年五十九

てかりはなりてはまりける時ふる人々

前大納言為家

かりまくはのこかやしたもる物と我身共まよ今あかり

歸雁を　　天台座主公豪

雁よはいかに思ひて帰るらん老の命といそたのまん

藤原隆祐朝臣

桜風よあひらむとは命とも思へて久かる身共なるを

前関白一条家より百首ふるに雁

右大中将雅家

物思ひを寄の山のふもとに海人の共のかりの命

建保百首歌たてまつりける時

前中納言定家

花のあるひと共まけよ海人の苫越路のそたのうて

物花の白を　　月花門院

咲よりまやの野辺の桜花あまの秋ふるかせにに

花哥の中よ　　右兵衛督公宰朝

伊勢ものをとこのあるとしたのむらの共なるね

右近中将師良

今夏は去て人も見ぬ共花のあるは

前大納言為家卿

野花　菊原仲敏

咲ちるは色をも里とは惜らん花ゆゑとよしの宿とは

如圓法師

咲そめしあはれと花の白ひて底よりかをる山さくら哉

河邊花といへる詠を

源時清

ちるまでは波も惜らん花のうへゆく川の水

者文第力ゆく行ゆくかをるを思ひ出てよしの

菊原泰改

いくしほの末はみ山のさくら花ちりてもなをのけそ哉

春花といふことを詠侍る

権大僧都嚴雅

いかゝ乃あるとは見れぬ春ゝ花もいくしほ山ひ出ん

前大僧正道玄

同人を

みそ見ぬ世ゝ春と思ひて哀とそ志賀の花園

東山ゝ花乃人ゝ海うてらゝ侍る

長法師隆親

思ひそのこゝろ人ゝ海まち花ゝ濱の叩らさり世ハ

花の咲ぬ中小　お間大臣　基

ゝ海うゝ花ゝ叩ゝ花ゝ叩ゝてまわあ心ハ行ぬ春ゝ

年ふる桜の花もちりはてぬ　夜半の月の春の名残り　夜半内大臣

いづくとか山の桜のさかりなる　花の名残りの春の名残り　信實朝臣

軍陣の花よりとぶ雲なれば　花の名残りの春の名残り　法印公朝

なりぬべし八十九年の春の花　世のうれしかるべきの命なりけり　京月法師

世のうれしかるべきの花なれば　花の名残りの春の名残り　真願法師

春ごとに花のさかりの春風の　吹きかへすなる春の名残り　源乃神

吹きかへす春の名残りの花の色　花の名残りの春の名残り　源乃花五十首歌

春の名残りの花の色　花の名残りの春の名残り　前大僧正慈鎮

春の名残りの花の色　花の名残りの春の名残り　法印慶政

春の名残りの花の色　花の名残りの春の名残り　世中

花盛りの西園寺入道前太政大臣の許にて

春の名残りの花の色　花の名残りの春の名残り　前中納言定家

大方の春の名残りの花の色　花の名残りの春の名残り

花をたづねくらしはてぬる

蓮生法師

あさまだきこの人の命をそ花をいとふにはかなさぬらん

雲林院にて花のおもしろきをみて

中原行能

命をもたづねあてそうれしきにいとふにもなほ惜しかる

藤花をよめる

平長時

ゆきてふるいろのやをれもなほよりをさそはと心風にまかせ

なりて世の惜しからぬにも藤花さそひるなりて長風

静仁法親王

花みなかなせまに散果て我方世にまつ剣ぬるとは

大門の花見侍りけるに人のもとにまかりあはせ侍りしの事よ

源光行

鶴ぬきぬ物とりあつめたる物の庭の花の白雪

せし

法眼宗圓

ちりぬれはかなしきものと思ひしかとかくて寄るに

頭しらす

人さそふ

藤花今やちるらんみなりの山さきの風まにまにまつ雪

水色霞花と共に消ぬる

菅原泰綱

春雨に色の梅乃うつろひて淵さとにぬる花の白波

法印憲実

数ならぬ身も思ひ知れあへぬ花の白波

平長季

ちりのこる花の下ぶすまうつろひて山の井の水

前関白左大臣　一条

春の夜乃中よ

滝川乃水のみえて吉せぬ嵐乃音ぞ聞らるゝ

菅原宗泰

散て消うせぬる花の色ぬるすも浮雲乃白雲

祝部忠成

梅色ようつろふ中ぬ春乃ぬ雲乃ぬ

平義政

月乃ぬ出ぬ我涙ぬ袖乃ぬ

中御門宣胤

ちりぬ乃ぬ出ぬ花乃ぬ袖乃ぬ涙ぬ

寛治百首哥ぬ時　三月

前内大臣　泰

ちるあぬ花乃ぬ春乃ぬ雲乃ぬ月

百ねんのとし時　前大僧正隆弁

花ちるとなほ今のはるかなる　ちぎりの月の

春の夜の夢

住吉の松の高えの春の花　千年をかけて咲くらん

立ちまさる百とせのうみくれなゐの　花の色の

うらなみうつ　藤原定家朝臣

春日山谷の松とうらなみも　皇太后宮大夫俊成

高砂のをのへの桜さきにけり　尾上の霞たちかくすらん

前中納言定家

たのしくもさかりにあへるはるの花　ちるをいとへるこころ

前大納言為家

立ちかへるのちぬ松の春ごとに　ちとせをかけて

三代の栄乃花ぞ　為氏

去日山いのりし来れ世々ふれど　むかしのかゆる松の春

法皇覚寛よ　為世

世々を経ぬ七十首の　中

八重咲高砂

[illegible]

[illegible]

[illegible]

北山殿のこさるゝあつ[illegible]
世[illegible]の[illegible]けゝ人の卯月乃はまりてさて
事[illegible]なつゝけ歟

平泰時朝臣

[illegible]て和哥ゝ[illegible]川郭[illegible]
夏の[illegible]中[illegible]

法二位行能女

[illegible]ねそうゝみもゝそゝ時[illegible]

閑白の義[illegible]なそ[illegible]郭云を[illegible]て

前関白花大臣　鷹司

[illegible]大内山乃はゝ[illegible]

法[illegible]

[illegible]の名は[illegible]文の時[illegible]

百首[illegible]時

静仁法親王

[illegible]人[illegible]世の郭云[illegible]の世花の[illegible]

寝覚時[illegible]

前大納言乃氏

[illegible]ねとうて[illegible]花の[illegible]

実基

暁時[illegible]

徳大寺入道前太政大臣女

[illegible]別[illegible]郭云[illegible]の月[illegible]

夏[illegible]乃中は

[illegible]散女

あやめぐさ十そいとくけるかつらのねぬのうきね

いかりへと西せきのゆふの面よりかすみそめ花　摂会左大臣

百敷や夜ふけてうちもれぬ月のみ山ぶかの花　左衛門督実教

夜遍情とはとて大臣公豪

たちつくすそのかの神の高とまつも花の梢をそ前恋さ

河辺月面　　花原景家

憂きせいあるはなをそ去時河辺うくへ月面の

中将と申して年久しくなりぬる月面

乃以人のりとみつらをけり　伊法雅有

いふせん我身ひとり月面まよたのむみをれ出そくへる　源親行

郭公とはるの月面のやまの山乃なくこそ時ぬ花の梢をそ花　法眼慶融

郭公みしよ今都をなわ成くはなきこそ法て　前

郭公十首合之時夏歌

草ぬ代夜野の乃ふ海ふ　山階入道左大臣

ぬ代ふ海ふ野の乃ふ海ふ　前

法橋春撰

きゝ山下法の月やうむらぬ雲の月かな

あるかなくしく秋勧修寺よりて

ゆく秋

大僧正道寶

とゝまりあれ宮こまでこれ者ゆくれも秋雲の

百首哥時　入道内大臣

御後ゆくあれゆくて法のもくゆくかなわ空とれの

六月後と　前大納言為家

ゆくさ月ゆくせもるくゆくこれて宮こまでこれのゆくかな

すゑ

續拾遺和哥集卷第八

雜秋哥

秋林のゆくるみ紅葉

前左兵衛督教定

物思ふ秋の林の紅葉乃枕ゆ寄ゆ秋の宿かな

光俊朝臣

ゆくるゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく

後京極摂政

袖乃ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく

袖の露の玉

今ハ浦く成ぬ行宴の志ゝ乃緒の神也

蒲生田延成

色ゝにうつろひゆくハいろ〳〵なんるひくわられ秋の初風

文永十二年（後宇多）七月七日内裏ゟ七首ゝ

時　前大納言為家

大河内ゟ水乃流乃波文字ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ

醍醐入道前太政大臣女

ゝさゝ乃波なるゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ

静仁法親王

萩の葉ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ

弘長元年百首ゝ乃ゝ乃ゝ時萩を

前内大臣　基

萩乃葉ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ風乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ

（ゝ乃ゝ）

前大納言為家

いゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ萩の葉に吹ゝ風を撫ゝ

萩風ゝ葉と吹ゝ乃ゝ

高階宗成

姫の秋乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ

[illegible]

姫宮の中より　前大納言基良

[illegible]

常盤井入道太政大臣乃中山前宰相

[illegible]

山階入道左大臣

中務卿宗尊親王家の宮合より秋夕

[illegible]

左中将具氏

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

前摂政左大臣　家經

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

平親清女妹

[illegible]

藤原景綱

[illegible]

ゆるされいむかの御堂の寂寥たる風ようの哀れ秋のも

源親行

夕さまいの海やあまの入江のおとれ独て寂寞

安嘉門院四条（邦子）

ようにさく中井の居れ初つさと秋ちさとやうもてきつん

前内大臣　基

河水よりてうの鳥のけみ立てかさりうの玉章

建長二年九月十三夜十首会よ寄同

鳥

中御門院小宰相

ちとりの宮立ていく居もとれ初ひの行くひの方と

荻原清朝臣

れきの門茅ふれ秋雨ふるやの居乃なくん

海色寂

中原行實

いまは又ぬれ行ふ浦ちとて毎日りるき秋の夕ちも

三井寺うて月前のみ絵ろよ

浄助法親王

中とあるみうれ山の嵐風ふ行ふ行くいふ月ふ

田家月ふ

荻原時明

居むしき梅ちのと田いのうて秋ふ月ふ

月前述懐ふ

藤原長京

[illegible]

法印隆助

せめてなを月みるあきの[illegible]

[illegible]

澄覚法親王

[illegible]

弘長元年百首歌

[illegible]

前大納言為家

[illegible]

妹背の中に

[illegible]

建保二年姉十首歌時

[illegible]

[illegible]

題しらず

前大納言為家

[illegible]

西行法師

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

法中公朝

建長三年九月十三夜十五夜合ノ名所

月　　兵部ノ権親

ものとくみも昔の秋の月　　長子

月かな　　寄月恋　師

月をてまさ袖よりはさ　　東大后宮中宮後嵯峨

なり山はの月やはらるる秋の月　　神のなるは

嶺しの月ぬ宮ぬ月ぬ　　人のうら面け

月はれぬる月は我とそ　　法院贈波

月ぬ

我人ぬ月ぬ　　後京長徳

やそ人の月ぬ秋を思ふ　　ぬ

宮雅ぬ入道前太政大臣家ぬ月ぬ

ぬる中に　　前大納言為家

ぬ月ぬ我宿ぬ月ぬ　　ぬ

洞院摂政家百ぬ月

お中納言定家

むら雨まにやはらぎそめし秋の月

松門到暁月　俳徊

和泉侍従朔日

松の戸はのこりなく山のさやかにてやどらぬ秋の月

園明寺殿山月といふ事を

前関白太政大臣　一条

山ぢくらの月の輝くをしらでなほ清き嵐の秋の月

題しらず

光俊朔日

あはれなるかたのみ残るうきよかな月をうらむる

眼源兼

うらむるとうきよをなれしかたをうらむる

あはれむるとは月をつくるよりうらむる

月ゆゑ乃事を思ひ知るくらぶ山乃秋のくらぶ

道法法師

まつとせしまむ山里のさびしさも我が心の秋乃月かな

定源法師

月ゆゑ乃事は　法印覚宗

今ぞまこと多よりてもうらふるさとゆく嵐ぞ

信實朔日

[illegible]

前大僧正道玄

月をうら山路の嵐乃吉ゝ神ぬ[illegible]

右百首哥のうちに

順徳院御製

伊勢山やまゝそう枝の月おろ[illegible]

良暹法師

[illegible]

晴ゆけハ[illegible]

建保二年秋十首哥

源家長朝臣

[illegible]

前内大臣基

[illegible]

平忠時

[illegible]

法印公朝

[illegible]

賢助法親王

[illegible]

前大納言長敬

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

我すてみいるてまちゆくふねの人乃松浦河を感ぜり

平義宗

風ふき雲はらはらとたちくるよ河面てらす葛城乃山

入道二品親王家歌

中務卿宮親王

いりえちかう鳴れわたるの方ぞ秋の夕ぐれ

入道二品親王性助

ちぎらんと物のそなたに思ふ秋の夜の月ぞ心にかかる

古寺秋といへる心を

ふる野山わけ入ぬれば秋の夜の月ぞ心にかかる

心圓法師

神前の月清かりけるに人々たちもとまりて

人々たちもとまりて　選子内親王

寂寞とおもふ心にそわるもんちかう猿の聲ぞ

なりまさる

蓮生法師

なりまさるおもふ心をしるしとて門の氷を妙乃谷川

權律師仙覺

ちやの池乃あまれる水をさそ物とうるおそ月

永治元年（十二七）宗德

新嘗會の日の宴（美福）后宴の儀ありける人々

たちうつる　皇太后宮宴後徹

[illegible]

源義氏朝臣

[illegible]

上西門院出家

[illegible]

典侍親子朝臣

[illegible]

平時成

[illegible]

前兩位藤原

[illegible]

左近中将師良

[illegible]

前大納言良教

[illegible]

建長三年四月十日ありける時

[illegible]

[illegible]

[illegible]

續拾遺和歌集卷第九

羇旅哥

猿丸大夫

二条太皇太后宮大夫 令子

ちはやぶる君がいせぢの道なれば
ひとりまさりけるかな

菅原孝標朝臣

あづまぢにまかりはべりけるに
ふじのゝ煙をよめる

たちのぼる
ふじのゝ煙
たえぬとも
なほ
ゆくすえ
なるかな

藤原為家朝臣

ゆくすえ
なるかな

神やどる
ふじ

みちのくにまかりけるに
津守国基 摂津国人

あづまぢに
ゆくとてみちの
山のはにて
ゆくすえ
はるかに
なるかな

源光行朝臣

ゆくすえ
はるかに
なるかな

如願法師

ゆくすえ
はるかに
なるかな

旅衣きてくもとゐる人のみる道坂の関
ゆくすえはるかなるかな

菅原景綱

ゆくすえ
はるかに
なるかな

あづまにまかりけるに
不破の関屋にとまりて
ゆくすえ

漢人しらす

都といふ所さとりなりけれ国こそあるみの中山
知へまりける道こそあるなれ

後京極殿

けふの空いかなるよもやなれも山ゆきをとをみる
道助法親王家百五十首歌中に

藤春雨　如願法師

ひとすいふれて出ぬ人も神ぬ境
猶人を　前大納言資実

ふれしらぬ井のもとやの桜みてをかはらの
雨ぬ

羇中杜鵑事

前大納言為家

ふるさとの日数をへて夜ふけ衣打ふる時
あけぬまの山ほとゝきす雲ぬ
つゝすてはなほ成ぬ

津守国助

ふる河の岡をゆく雨ぬ日数へぬ旅ぬ
ふる

観意法師

夕暮ハ衣ぬ雨ぬ
ひとりやこえん白川の関

行中納言具房

陸奥宮城野旅館
名こそ
白川の

立日ハ[illegible]

[illegible]

[illegible]

草枕[illegible]孫の神ハ[illegible]尾花[illegible]

寶治元年十首奇合ハ信宿嵐

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

家ゝ年首奇渋柿ゝ野猿

入道二条親王道助

[illegible]

羅漢の心を

行之信為絶

[illegible]

[illegible]

中務宮尊親王

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

西行法師

[illegible]

寶治元年十月廿日合戦宿願

前右兵衛佐為教

[illegible]

[illegible]

[illegible]

初冬小春にて花を法華堂に人と酒
樽を中にて　好京極殿故太政大臣
まけられきそれより桂あしくよりまさりて
家司合よ霧中松風　光明寺入道前摂政太臣
あしの原日もすがらのうら波打くるめる浦の松風
守覺法親王御出　平前司家より樽と
夕涼の頃まで酒と枕をそなへたりけるなり　野文殿入道
樽酒のこと　法二位御歌

越やて今ゝうしりあれ山ゝもさゝ岩のゆき通

平長時

あうれ山の麓よゆきられ一秋宿ゝ竹のさゝ乃

なつまのゝさよゆゝうゝ時ゝみゝゝ

律師玄覚

ゆまとゝいゝゝゝゝ移ゝゝゝゝゝゝゝゝ乃ゝゝゝゝゝ

むゝの八潟ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

後三位光成

教家朝臣

ゝゝゝゝ宝乃八潟ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

大学こそとみ給ひけり

法下良賓

今とは成むとの法をとりてこそ為りけるみち野の山

頭しらず　平行氏

出てとる法よりの山乃ぞれ法きやまの松なるん

白河殿七百そ会は霧中山

松そ一日数のこゝハそ　検大納言源俊

猿丸大夫

猿丸大夫

みやこ出てこゝ家あきを花をこゝ衣の関をこゝ

猿人乃夜ハ関のこゝ　郡へこゝ

猿丸こゝ出ゝ　嵯峨園入道前関白太政大臣

こゝ日紙数を思ふ事ハ海ゝ　ゝ

こゝ河こゝみ行ゝ　前大僧正隆弁

七十九年ゝ　河光の原ゝ

伊勢ゝ海ゝ　小舟

ゝこゝ　ゝ

をとこ有よりまさる人の侍りて侍りける
　　安嘉門院甲斐
くらべつゝ
きてもなれひさしかれ猿衣ちりあとはのこるなん
　　たゝを大将朋光
いそさつゝまをとこ立まさる人やうらやましき
家よりは有ける猿のこと
　　洞院摂政前太政大臣
如人月をそよめうしてもいくちとも我をまけうん

續拾遺和歌集卷第十

賀哥

後宇多
建治二年八月亀山殿にて松色
浮池と云題を侍りしに

太上天皇

第代と亀の好む乃末久ゆくすゑあり富の池
　　勝政前太政大臣　勝平
池水に松のをもをうつしてもかゝる所の
寶治二年百首歌たゝ池上松と云
　　冷泉為相大臣

帝王編年紀云三月四日上皇并大宮院御幸西園寺五日一切經供養也可准御斎會之由兼日被宣下耳天皇臨幸春宮行啓姫宮同渡御有舞樂六日有御遊和歌會

後深草

正元元年三月西園寺の一切經供養に

亀山　東二條

行幸行啓ありき文中宮おなじく行啓ありて

御日人々歌花とりどりにつくりまゐらせる

前大納言雅俊

一代要記云二月十三日

行幸嵯峨殿同十九日

還御

亀山

弘長三年二月亀山殿より行幸ありて花園

近衛殿に渡御ありて

山階入道左大臣

冷泉太政大臣

前大納言雅俊

公基擬一代要紀建長五年四日八日任右大將

建長六年三月廿合の梅を

万里小路左大臣 千時左大将

和歌二年当殿かく池上花といへること

家家入道前関白太政大臣 忠實

寶治百首 今出川右大臣

常盤井入道太政大臣

文永八年七月 後深草院御歌 千載集

時女房の中に有りてもまたをく

春まつ山のかすみ

前内大臣

弘長三年九月十三夜内裏十首会 左大将

時月前花

家久卿云為氏

春かすみ山ゆ井の月ゆ

夜よ十首会 山階入道左大臣

寛治八年鳥羽殿 白河院

宮内卿 新古今

春の夜の月をもとめ

春の夜の月をもとめ

[illegible]

[illegible]

寶治元年十首歌合に海邊月

正三位藤原朝

[illegible]

同二年鳥羽殿五首歌に月前述

[illegible]

正二位藤原家

月ゆゑ久しいふる[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

文永五年八月十五夜内裏に合る田家

見月　前中納言資宣

民[illegible]田面のいなむしろ[illegible]

[illegible]一位倫子[illegible]

右[illegible]

百首歌の中に　宗治入道前関白太政大臣頼通

[illegible]

菊花[illegible]

[illegible]

いとをしむせあれはかりあるしるよのうきしれは白菊の花

西法百首家の秋　前大僧正慈鎮

年をへてつりをしる舟はてをうきかりの寄の色

法成寺入道前関白太政大臣　道長公

新千載

あれはのをしのあしの花の色もよをの数にうつろふ

宮内卿

海松とはるかにみるとは常磐井の底の藻の太臣

海人の風おさまれる浪のうへよりは世代の初

文永三年三月後白河院入道前太政大臣

法花山院入道前太政大臣

太宰帥帥為俊

のをくふかくをしまれあるは代をつくして浦沿

建仁二年十一月和歌所にて天河九十賀

たまの年をかぞへはてはかな

前中納言定家

君よはの十年の数をつもりてはるかの浦沿

お中納言兼光

かきりあるさかりの山の花はかりは

大納言為家

をしらくはさかりの色と照ぬれはうつの山の紅葉

建長五年七月三首家百

擬一代要紀云建長四年十二月十三日任内大臣五年四月八日夢左大将

冷泉太政大臣　于時内大臣

かすみなびくひろ八方はるかまち流のゆるみきれるしのゝの月

後乃心と

大原やをしほの松そ志ら代のいかもうつゝぬたのみなるへき

内大臣云長家

建暦二年らんの月の日前中納云宮内卿

桑城雅俊　于時左中将

按建暦元年十月廿二日大賞會御禊十一月八日春花門院崩御是故大賞會延引同二年十月廿八日再被行御禊事見皇代記百錬抄

一代要記云建治三年正月三日御元服年十一

今上の御元服乃時大納言ゆりなりて上ゝの

御ものゝ役つとめ侍りしとき

皇代紀云十一月廿二日乙卯大賞會

兵部卿隆親

建久九年大賞会　土御門

四国神社有祈祠和歌

前中納云資實

沼運録云十月十三日大賞會

仁治元年大賞会　後嵯峨

前参議為長

帝皇編年記云十一月廿日大賞會

永禎元年大賞会　四條

悠紀方国風俗方朔日山

悠紀方已日　廿二日　の樂所

要記五十一月十六日
己卯大嘗會

江國真米村

[illegible]

亀山

文應元年大嘗会 惣紀方御屏風哥

玉井

民部卿光

[illegible]

[illegible]

[illegible]

国立公文書館
National Archives of Japan